靈の珠を見出すであらう。

我音樂部の誕生祝である處女演奏會は大成功裡に終了した。小規模ながら管絃及びコーラスの一通りの形式は整つた。然し棘荊の路は尙續いて居る。生れ出る惱みよりも一層苦痛な育ち行く者の惱み。管絃樂完成の爲に必要なる各部員の團結熱情の不足不滿。だが音樂部自體に對する愚痴は止そう。其は一つのトライアルなのだ。今僕等は練獄の中にある。やがてヴアーヂウスは僕達を永遠の女神、魂の樂園の下に導いて呉れるであらう。尙音樂部は龍南文化の爲に生れたる團体であるから、龍南人諸兄の一層の御聲援を御願ひ致す次第である。

五月上旬演奏會を開く豫定であつたが練習不足、資金不足、曲目の選定難の爲、且又私自身論文草稿に時間を取られて、遂に會合練習の機會を逸した事等の爲に、開く事を得なかつた、ひとへにお詫び致します。

次期演奏會は九月下旬に開催の豫定。

本年度豫定練習曲目

一、組曲、胡桃割り……チヤイコフスキイ

二、組曲　ペーア、ギント第一……グリーク

三、序曲　アテネの廢墟……ベエトーヴエン

四、序曲　ロザムンデ……シユーベルト

五、序曲　イーグル、ネスト

其他　シヤミネードのセレナーデ。モーリス、ダンス等

「文藝座談會」に就いて

龍南の若人達がその血を沸したポートレースを前に五月二日、文藝部は座談會を催した。座談會の主題はやはり文藝部に適はしいものをと、「近代生活と文藝」とし左のやうな順序で、先づ一通り出席者の意見が交換された。

一、座長挨拶

二、自己紹介

三、龍南生活との關係

—（九八）—

「龍南」誌批判（各自の希望意見等）

四、一般生活と文藝

1 文藝と生活との關係及び文藝の生活に及ぼす影響

2 近代文藝の批判

近代文學の流行等に就き

3 文藝の伸縮（生活に基いての）

4 將來の豫想

五、結論

出席者は教授側より、八波部長、渡邊教授、竹下教授

生徒側より、河野君（文三甲三）、山上君（文二乙）、中井君（文二乙）、入江君（文二乙）、三橋君（文二乙）、持永君（文一甲一）阿波田君（文一甲三）、千坂君（理二乙）、山口君（理一甲三）

委員側より、朽葉、岩永、佐々木、桑原大森

座長は部長の希望により委員中よりやることになり朽葉君を煩はした。

豫定の順序では、自己紹介と「龍南」誌批判は別にして置いたが、「龍南」誌批判と自

己紹介は一緒になつて了つて、……けれども皆今日の「龍南」誌の委靡を歎かれいろ〳〵の注意を頂き、その點同感の念を有する委員達にとつて好い勵ましになつた。

それから次の「一般生活と文藝」といふ項目に這入つて、先づ、八波部長は、古い思想の持主だからと前提し、文藝は「人を喜ばす爲」のものであつて、生活とは余り「密接」な關係がない、と考へてゐると自白される。此に對して早速竹下教授が「眞の文藝は八波先生の」やうなものではない、と一矢放される。此の時、委員側としては生徒諸君の感想が飛出すであらう事を期待してゐたのであつたが、どうしたものかやはり「沈默が金」であつた。

プロ文學が竹下教授の口に登る。

「あんなのは讀んで面白くないですね」。部長の思想果して古いか。

渡邊教授、待つてゐましたと、プロ文學には「個性がない」。文學と生活が「平行して行つて」ゐる。「人生の中に這入つて了つて」動かない。もつと「人生を Over しなければ」駄目だ。人生が余り近過ぎる、拔け出て達觀しなければならない。とゼスチュア宜敷く其處のところ旨いものだつた。

まあこんな風の調子で、――こんな風の調子と言つても菓子を嚙り乍ら、集合所の例の麥茶で咽を沾し喋舌り出すやうな調子ですから、さう大した調子でもありません。――チチアンの繪が出たり、「ゲーテが佛蘭西革命を豫想」したり、懸賞號の小說はもつと「學生らしさ」が必要である、といふやうな事、それから「近代文學の流行」に移り、「どんなのが、最近面白かつたか」、と先づ各自の讀書の中から嚙り出さうと言つた趣向。「昔は『愛は惜しみなく奪ふ』なんかよく讀まれたもんですね」。「有島さん」の生活もさらけ出される。片岡鐵兵、林房雄といつた連中も勿論容赦されない。映畫化された作品も出て來る。「何が彼女をさうさせたか」。「西部戰線異狀無し。」『西部戰線』は感心しなかつた。」「讀まなければ好かつたと思つた。」此は部長。「學校で讀ましていけないと云ふものでもありませんね、勿論教科書には使へませんが。」等々大分『西部戰線』には異狀がある。次は丁未子さんの谷崎潤一郎。「あれは分らない。」「僕にも分らない。」

「しかし文章は旨いですね。」

プロ文學が再び俎上に上る。

「プロ文學は同じ型である。」「二度と讀む氣はしない。」

（諸君、二度と讀む氣がしない佐品は決して傑作ではない。それで出版部數の多いものの必ずしも名著ではありません。何度も重ねて讀まれるやうなのが、傑作です。但し以上は八波部長の說）

「長塚節の『土』のやうな作品はもう出ません。」

それから志賀直哉武者小路實篤と云つたやうな人のこと。森田草平の「煤煙」。

「ゲーテは廣い世界に生きシラーは藝術一點張りで世界が小さい。」「ゲーテを救つたのはシラーである。」「ゲーテは階段的に進み、シラーはカントの哲學を見つめて一直線に進んだ。」

部報

次は獨逸最近の文學の傾向。「戰爭文學が一般に讀まれてゐるやうです。」

「横光利一の『機械』『悪寛』等好きです。」

それから、此も文藝と生活の一番接密な關係の例であらうが、小説書くことゝパンの問題の話が一くさり。

ついでパンダインの探偵小説に迄話が及んだ時はもう出席者の口の中も莫子許りで少し甘くなり過ぎ、時計の針もいゝ加減廻つたので、最後の結論は省畧して、出席者の勞を謝し、散會した。散會はしたものゝ委員連中の心の隅に何だか、不滿がある。それは、折角出席して下さつた、生徒諸君が、余りにも、「沈默の金」を尊長し過ぎて、—それは時には「唇が寒い」こともありますが、——傍聽者になり切つて了はれたことである。何しろ初めての試みであり、準備の時日が短かゝつた爲充分の用意が出來ず、その爲固くなつて居られたことゝは思ふが、兎に角少し寂しい氣がした。

實は、此の座談會の内容は、速記して、龍南誌上に發表する筈だつたが、人の都合で速記が出來ず、殘念乍ら、唯經過の概要だけ、述べた次第である。妄言多謝。

（大森記）

『編』『輯』『後』『記』

星が一つ、白銀の蒼味を通して靜かに流れて行く。黑く澄渡つた夜空の彼方には、幾多の妖精達が無言劇を演じて居る。死ではなからうか。いや、詩だ。六月の微風の中から眞夏の海の波々のさざめきが聞こえて來る。其昔、壯者レアンデルは優美極み無き戀人ヘーロの爲に命を捨てた。そしてヘーロも亦其愛人の後を追つた。其は星が僅かに二つ三つ輝い居る風の夜だつた。二人の戀は荒れ狂ふ海の中で魂の光りを、永遠の生命を獲得した。永遠者、普遍者、眞なる者、魂の故郷、神に憧憬がるゝ、エロスへの限りなき追慕、編輯を終へた後の青白き感傷の中に、曾て露に沈きぬれた夢想者は、靈ディモンを求めて、再び枯れた思索の野をはてしなくもさ迷ひ辿らねばならぬ。期待した龍南新生には靈の光が少なかつたからである。罪の衣はレーテ河で洗はれた筈だ。其だのに何故？是が時の潮か知ら。龍南人諸兄の胸に問へば解るだらう。

×

例に依つて原稿が少なかつた。詩篇は僅か一つ。句は一つも無かつたので、岩永君朽葉君に御無理を願つた仕第である。小説も亦一篇もよらなかつたので是も和田先生に御無理を願つた。

島田君の評論「劇團に就いて」は本號に於ける異色ある收獲物であると思ふ。總ての物がプロレタリア、イデオロギーの下に働きかけて居る今日に於て、檢閲も無事に通過する樣無難に書いて下さつた氏の苦心は誠に感謝しなければならならぬ。

杉野君の科學論文は龍南に對して新機軸を出す物として眞に注目に値する。從來の龍南が理科生に對して、餘りにも緣遠いとの感があつたので、造船航空に對し不斷の研究を積まれた杉野君に御願ひして書いて貰ひ、此弊を除かんと企てたのである。今後は理科生諸君の此方面にも大きな期待を有する故、どし〳〵發表して貰ひたい。

既に作家として充分の力量を示して居た中井君は今度の戯曲への轉向に於て一層の